

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530670

研究課題名(和文)現代都市社会における時間・空間の生産・流通・消費と編成の社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological study on the production, circulation, consumption and organization of time and space in contemporary urban society

研究代表者

若林 幹夫 (WAKABAYASHI, MIKIO)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40230916

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代都市社会を時間と空間の社会的生産・流通・消費の形態という点から明らかにすることを目的としている。具体的には、現代日本の大都市とその周辺領域に建設された大規模商業施設(ショッピングセンター及びショッピングモール)を主たる対象として、現代の都市社会において社会的な時間と空間がどのように生み出され、流通し、ストックされ、消費され、編成されるかという点について分析し、それによって現代都市社会の構造とその動態を空間・時間・移動・イメージなどの点から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to realize contemporary urban society from the view point of the production, circulation, consumption and organization of time and space. In order to research concretely, we investigated shopping centers and shopping malls. We analyzed their history, their spatial and architectural structures, their temporal orders. We found out the social structure and social dynamics of contemporary urban society from the points of view of space, time, mobility, image, and so on.

研究分野：社会学

キーワード：都市 時間 空間 ショッピングセンター ショッピングモール 東京 情報化 モータリゼーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会は、その内部にそれぞれ固有の時間的秩序と空間的秩序をもち、社会生活はそのような時間的・空間的秩序の中での行為や関係の時間的・空間的な配分を通じて営まれている。社会の中で時間も空間も所与の先験的カテゴリーではなく、行為や関係の配分とそのリズム、間隔、周期の集合的様態とその制度化、建築物や建造物、活動の速度を変化させる交通・通信メディアなどのテクノロジー、そして時間や空間を了解し、イメージする意識など、複数の水準で社会的に産出され、人びとに利用され、不動産市場や交通・通信産業などによって財として流通させられ、これらの過程を通じて編成される。

(2) 社会を時間的・空間的な秩序として捉える視点は、エミール・デュルケムやゲオルク・ジンメルの古典的研究によって提起され、シカゴ学派の都市社会学、クロード・レヴィ＝ストロースの構造人類学、アンリ・ルフェーヴルの都市論、ミシェル・フーコーの権力分析などに、そうした視点は引き継がれてきた。近年でも、フランソワーズ・ショエ、デイヴィッド・ハーヴェイ、マニュエル・カステル、M. クリスティヌ・ボイヤー、エドワード・ソジャ、ジョン・アーリ、アンソニー・ギデンズ、吉原直樹、町村敬志、吉見俊哉らによって、社会、とりわけ都市を時間的・空間的な秩序として捉え、そこで時間と空間が社会的に生産され、流通し、消費され、編成される構造とメカニズムを明らかにしようとする多様な研究がなされてきた。本研究の代表者である若林や分担者の南後、田中も、これらの先行研究を前提に、現代日本の都市における時間と空間の構造変容を明らかにしてきた。

(3) これらの研究は、社会的な時間と空間の生産・流通・消費の様態が、交通及び通信メディアの社会的編成様態によって支えられていると同時に、それらのメディアが社会意識の水準において喚起する社会的な場や時間性のイメージによって媒介され、促進されていることも示してきた。都市をめぐるイメージや言説についてのルフェーヴルの考察や、サイバーシティのイメージリアルな現実性についてのボイヤーの考察などが示すように、交通・通信メディアが可能にする速度は物理的な水準だけでなく、それらが喚起するイメージの水準においても新たな空間や時間の像を産出し、それらが言説や表象として流通することを通じて、物理的現実の次元における空間と時間の新たな編成の媒介項としても機能してきた。現代社会における時間と空間の編成に関する研究は、この点においてマクルーハン、ヴィリリオ、シヴェルブシュらのメディア論や技術論と関わると同時に、そうした空間と時間のイメージを現実の都市空間において物質化する建築や都市デ

ザインの領域とも関わり合う。こうした空間の表象はル・コルビュジエを始めとする 20 世紀の建築家たちの建築・都市デザインによって表現されると同時に、そうした表現が現実の建築や都市デザインの規範として大きな役割を果たしてきた。これらの問題については磯崎新や原広司等の建築家たちが考察を重ねてきた。

(4) 上記のような背景のもと、本研究の代表者は、本研究で研究分担者として参加した南後、田中の協力を得て、2009～2011 年度に科学研究費補助金基盤研究(C)「消費空間を中心とする消費化・情報化時代の「都市の論理」の社会学的研究」(課題番号 21530566)で、東京大都市圏の大規模商業施設(ショッピングセンター及びショッピングモール)を主対象に、それらの施設がその内外に生み出す時間・空間の秩序と、それらの施設が前提とする現代都市空間の時間・空間の秩序の調査分析を行ってきた。こうした商業施設を主たる対象としたのは、ショッピングセンター・ショッピングモールが現代を代表する大規模都市施設であると同時に、その成立と展開を見ることで戦後日本の都市と社会を時間と空間の編成を、消費文化やモータリゼーション、情報化、アメリカナイゼーションなどの社会変動との関係で分析することが可能であるからである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、上述の研究背景とこれまでの研究成果を踏まえ、現代都市社会を行為や関係の時間的および空間的な編成体として対象化し、その編成の様態を、時間と空間の社会的生産・流通・消費の形態という点から明らかにすることを目的としている。

(2) 上記の目的のため、2009～2011 年度に実施した「消費空間を中心とする消費化・情報化時代の「都市の論理」の社会学的研究」に引き続いて、現代日本の大都市とその周辺領域に建設された大規模商業施設(ショッピングセンター及びショッピングモール)を主たる対象として、現代の都市社会において社会的な時間と空間がどのように生み出され、流通し、ストックされ、消費され、編成されるかという点について分析し、それによって現代都市社会の構造とその動態を明らかにすることを旨とした。

(3) (2)の調査・分析を行うために、現代都市と現代社会の論理を、建築・建造空間とそのイメージの社会的形成、モータリゼーションや情報化と都市の空間・時間の関係、近現代の都市と社会を支える進歩主義的な時間の構造などの点から、現代都市における時間・空間の生産・流通・消費・編成の社会理論の視点と方法を検討し、研究の枠組みを確立することを旨とした。

(4) さらに、本研究の成果をもとに現代都市と現代社会における時間と空間の社会的編成についての研究をさらに進展させるための新たな研究計画の作成と、そのための準備作業を並行して行うことも、本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 日本ショッピングセンター協会に代表されるショッピングセンター業界による「ショッピングセンター」「ショッピングモール」の定義と、それらの言葉に対応する大規模商業施設の形態やそれらの開業数の通時的変化を、戦後日本社会の都市化・郊外化・消費化・モータリゼーション・情報化などの社会変動と、大店法・大店立地法などの関連法制などの行政上の変遷を関連させつつ分析することで、戦後日本の都市と都市の文化がいかなる時間と空間を生み出し、編成してきたのかを、巨大商業施設を焦点として分析した。

(2) 日本ショッピングセンター協会の協会誌『ショッピングセンター』(1973~2001)、『URERU』(2001~2004)、『SC Japan Today』(2004~)の記事の内容とそこでの言説、イメージを分析することで、戦後日本社会における小売り・流通業の構造転換を整理し、戦後日本の巨大商業施設の歴史とその社会的背景を具体的にあとづけると共に、戦後日本の都市と都市生活における時間・空間の生産・流通・消費・編成のあり方の通時的な変動と、それらが生み出した空間の社会的な機能や、それらが施設とその外部の都市の時間・空間に生み出した意味論の変遷を分析した。

(3) 1970年の大阪万博における会場計画やパビリオンの工夫が、現代の巨大商業施設にどのように継承されていったかについて、日本ショッピングセンター協会の協会誌や建築誌のバックナンバー、建築学やショッピングセンター業界の文献資料によって分析を進めた。

(4) インターネットやスマートフォンの普及ともなう空間・時間感覚の変化が、消費空間におけるショッピングや振舞いに与える影響を明らかにするため、関東・関西圏のショッピングモールのフィールドワークを行い、さらに、図面やテナント一覧が掲載されたフロアマップなどの資料分析を実施した。

(5) 上記の分析の成果を都市社会学・都市論・消費社会論・情報社会論・移動社科論などの既存の研究と照らし合わせることで、現代の都市と都市生活を支える時間と空間の生産・流通・消費・編成の社会的論理を、近代都市から現代都市にいたる時間と空間、身

体、情報、イメージ等の関係構造とその変動・変容を社会学理論の視点から明らかにすることを試みた。

(6) 上記の調査・分析の成果を共同の著作としてまとめる作業を通じてさらなる検討を行い、さらにそれを研究組織外の複数の研究者によって批判・検討してもらう検討会を2003年から2004年にかけて実施し、成果のチェックと新たな課題の検討を行った。

(7) 上記の批判的検討の後、巨大商業施設を焦点とする今回の分析の成果をさらに発展させるための新たな研究対象の検討・設定と、今後の研究のための予備的なフィールドワーク、文献調査、インターネット上の資料の調査等を行った。

4. 研究成果

(1) 戦後日本において当初は「都市の商業的中心地」を意味していた「ショッピングセンター」という言葉は、戦後の郊外化のなかでは団地やニュータウンに新たに作られた商業集積を意味し、あるいは巨大スーパーマーケットを意味するといった過渡的な時期を経て、郊外化とモータリゼーションを背景とした新たな都市の消費文化に対応するものとして1960年代末にその原型が作られたが、その後、日米構造協議を受けた大店法の改正と、90年代以降のポストバブル期の小売業界の新たな業態の模索のなかで今日のような形態をもつようになったことが明らかになった。これは、これらの巨大商業施設が単に流通・販売資本の論理に基づいて成立・発展してきたのではなく、都市化・郊外化・モータリゼーションなどの都市における時間・空間秩序の変容と密接に相関した存在であることを示している。

(2) 上記の過程は、巨大商業施設やそこでの余暇・消費活動、労働活動などを通じて、大都市と地方都市、都心と郊外が同型的な時間と空間の編成をもつようになっていく過程であった。さらにまたそれは、類似した空間構造と時間的秩序を持ち、類似した、あるいは同一のショップやブランドが入った巨大商業施設が地球的な規模で増殖してゆくという、都市空間の生産・消費・流通のグローバル化の過程でもあることが明らかになった。このように巨大商業施設とそれが生み出す時間・空間の編成は、現代社会におけるローカルかつグローバルな時間・空間的秩序の変容のなかで、社会における新たな場所と空間・時間の構造を生み出している。

(3) ショッピングセンターやショッピングモールの意味論に注目した言説分析からは、戦後日本の大規模商業施設が社会・経済・文化状況の変化に対応して、コミュニティ、カルチャー、エンターテインメント、

エコロジーなどの同時代的なテーマのもとにそのあり方を繰り返し定義してきたことが明らかとなった。それは単に巨大商業施設の意味論を示すのではなく、そうした施設が立地する都市や郊外、そうした地域を内包する社会において時間と空間を編成し、そこでの人びとの活動や関係や生活を編成する意味論の変遷を表している。すなわち、ショッピングセンターやショッピングモールは社会生活の意味やイメージの生産・流通・消費にも大きく関与しているのである。

(4) ショッピングセンター、ショッピングモールのフロア構成やフロアマップ、そこでの視線や行動の分析からは、1970年代から現在に至るまで、ショッピングセンターのモールの形態が直線型/オープン・モールから、ジグザグと蛇行性/エンクローズド・モールを経て、湾曲するサーキット型、ハイブリッド型モールへ変化していったこと、こうした空間構成の変化は洗練された大量の人のフローを管理し、人びとの振舞いを即物的に操作する、大阪万博でも見られた空間の形式や工学主義的手法が発展的に継承されていることが明らかとなった。このことは、メガイベントと都市の関係の研究における重要な知見と視点を提示している。

(5) 情報化・消費社会化との関係では、インターネットやケータイの普及にともなって、できるだけ時間を節約して効率よく買い物をしたいという欲求の高まりを背景に、ショッピングモールも「時間消費型消費」の場としてのみならず、「時間節約型消費」のニーズを充足させる空間としてあることや、ショッピングモールは、サインシステムに加え、検索やスクロールなど、情報空間に支配的な空間認識や経験のあり方を拡張しながら建築形態という物質的位相に定着させていることが明らかとなった。

(6) 上記の成果を都市論、消費社会論などの既存の成果と照らし合わせて検討する作業からは、こうした巨大商業空間が体現する時間・空間の構造が、パサージュ、デパート、ユニヴァーサル・スペースなどの、19世紀から20世紀にかけて生み出されてきた都市空間の特性を引き継ぎつつ、それらを現代商業資本の柔軟で多様な展開と相乗させることで、巨大で柔軟な空間のなかに「均質な多様性」と呼ぶべき消費の空間を生み出しており、それが社会と空間の「閉じつつ開かれた」構造や「透過性」という特徴的な構造を生み出していることが示された。

(7) ショッピングモールがデパートをキータナントとして取り込んだり、既存の商業施設や商店街がモール化をめざしたりするなど、ショッピングセンター、ショッピングモールは現代の新たな商業施設、都市や地域の

複合施設や、都市空間の開発・再開発における時間・空間編成のプロトタイプとして機能しており、さらにはコミュニティ施設として機能も果たしつつあることが明らかとなった。その結果、現代日本をはじめとする現代の資本主義社会では「社会のモール化」が進行しつつあることが示された

(8) 以上(1)～(7)の研究成果は、若林幹夫編著(南後由和・田中久介・楠田恵美共著)『モール化する都市と社会 巨大商業施設論』として、NTT出版より2013年に公刊した。

(9) さらに、シンガポール、香港、ソウル、上海のアジア4都市との比較からは、日本では商業施設が飽和状態にあるように思われるが、「ショッピングセンター」のデータで比較すると、人口1人当たりのショッピングセンター面積は、シンガポールと中国に比べて日本の方が小さいことが示された。また、最大総展示面積の「コンベンションセンター」を比較したデータでは、東京最大の東京ビッグサイトは、上海、シンガポール、香港に次いで4番目、「国際会議」のデータでも、東京の年間開催件数は、シンガポールやソウルに大きく引き離されていることも明らかとなった。

(10) これらの成果をさらに検証し、発展させるために、複数の巨大商業施設を擁すると同時に、鉄道・自動車道などの交通施設、物流施設をもち、埋め立てによって造成されたオフィス・商業施設・住宅地・娯楽施設などの多様な施設が展開する東京臨海部を新たな対象として選定した。それに関する基礎的な論文を国会図書館等で時系列ごとに検索・収集・整理する作業を行い、それらに関連する一般書・研究書も収集・整理を行った結果、戦後日本における東京臨海部は、首都圏の経済圏を支える物流拠点・交通圏として位置づけられており、近代都市を支えるインフラとして「後景」を担っていたこと、しかしながら1980年代以降の都市再開発の流れのなかで臨海部は都市の「前景」へとせり出し始め、2000年代以降は、消費空間や生活空間として開発され、2020年のオリンピックに向けて再都市化や機能集積を特徴とする21世紀型の都市を先駆的に形作る実験的な空間として位置づけられはじめていることが明らかとなった。

(11) 上記の成果をもとに本研究は、2015～2017年度に科学研究費補助金基盤研究(C)で本研究と同一の研究組織で実施される「東京臨海部における時間・空間の生産・流通・消費と編成の社会学的研究」(課題番号15K03883)で発展的に継続される。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

南後由和、主旨 特集 日本のおひとりさま空間、建築雑誌、査読無、2015 - 1 巻、2015、4 - 5

南後由和 + 明治大学情報コミュニケーション学部南後ゼミナール、グローバルシティ・東京のデータ診断 アジア4都市との国際比較から、PLANETTS、査読無、9巻、2015、128 - 135

南後由和、東京オリンピック 2020 に向けたスケッチ 都市とスポーツ、現代スポーツ評論、査読無、30巻、2014、98 - 109

田中大介、モビリティとモダニティ：近代はいかなる意味で移動的か、日本女子大学紀要人間社会学部、査読無、24巻、2013、1 - 16

若林幹夫、都市と災厄をめぐる思想【2011年の東北大地震とその後の出来事から考える】社会思想史研究、査読無、36巻、2012、8 - 26

若林幹夫、面影のない街の神話劇 平成ライダーの闘う場所、ユリイカ、査読無、44 - 10巻、2012、136 - 148

〔学会発表〕(計2件)

南後由和・藤村龍至、渋谷論の現在、伊藤園 presents Shibuya Hikarie 8/ Creative Session with J-WAVE、2012年4月30日、渋谷ヒカリエ

南後由和、川口からショッピングモールを考える、メディアセブン トークセッション、2012年5月6日、川口市映像・情報メディアセンター メディアセブン

〔図書〕(計10件)

伊藤守・毛利嘉孝・若林幹夫他、せりか書房、アフター・テレビジョン・スタディーズ、2014、183-200

丹羽美之・吉見俊哉・若林幹夫他、東京大学出版会、記録映画アーカイブ2 戦後復興から高度成長へ 民主教育・東京オリンピック・原子力発電、2014、139-158

若林幹夫、河出書房新社、未来の社会学、2014、247

若林幹夫、弘文堂、都市論を学ぶための12冊、2014、294

若林幹夫・田中大介・南後由和・楠田恵美、NTT 出版、モール化する都市と社会 巨大商業施設論、2013、350

南後由和・蘆田裕史・水野大二郎他、veritas 編集部、veritas002、2013、68-85

田中大介・近森高明・工藤康則他、法律文化社、無印都市の社会学、2013、126-135、192-201

田中大介・山岸健・浜日出夫他、三和書籍、希望の社会学、2013、145-162

五十嵐泰正・中筋直哉・若林幹夫・田中大介・南後由和他、ミネルヴァ書房、よくわかる都市社会学、2013、4 - 5・22 - 23・26 - 27・30 - 31・56 - 57・128 - 129・140 - 141・186 - 187

若林幹夫、弘文堂、社会(学)を読む、2012、158

〔その他〕

ホームページ等

<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/3592>

http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/society_140722.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

若林 幹夫 (WAKABAYASHI MIKIO)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：40230916

(2)研究分担者

南後 由和 (NANGO YOSHIKAZU)

明治大学・情報コミュニケーション学部・講師

研究者番号：10529712

田中 大介 (TANAKA DAISUKE)

日本女子大学・人間社会学部・講師

研究者番号：10609069

(3)研究協力者

楠田恵美 (KUSUDA EMI)

筑波大学大学院